

はくぶつかんの部屋 30



博物館で知ろう、大山!

市立博物館では、毎年、各々の自治会を中心に地域の方々と共同で行う「ぎのわんの『字』展」を開催しています。これは、市内1つの『字』にス

ポットを当て、その歴史や文化などを紹介することで、市民や県内外の方々に私たちの住む地域のことを理解し、関心を持ってもらうことを目的としています。今回で9回目の開催となる字展は、大山区自治会との共催で、「大山」を紹介します。

沖繩本島の西海岸に面し、市内でも有数の広い土地を有する大山には、豊富な湧水があり、市の特産品である田イモ畑が広がる自然豊かな地域です。また、国指定史跡の大山貝塚や、市指定史跡のマヤーガマ洞穴遺跡などの文化財があり、戦前に運行していた沖繩県管轄便鉄道嘉手納線(ケービン鉄道)の駅が置かれていたという歴史もあります。現在もその線路跡は「ケービンミチ」と呼ばれ、その名残がうかがえます。

ここで、大山を代表する「綱引き(チナヒキ)」について紹介します。戦前ま

では、旧暦6月15日に現在の国道58号にあたるケンドウ(県道)で綱引き行事を行っていました。現在は旧暦6月15日に近い週末に大山小学校で開催されています。大山の綱引きの見所は、綱引き前のアギー勝負です。アギーとは、両者が綱に挿した棒を持ち、相手と綱をぶつけ合う勝負で、綱を高く掲げる様子は、間近で見ると非常に迫力があります。

今回の字展では、大山の綱引きに関する資料を中心に、大山の歴史や文化、自然を紹介しています。もっと大山のことを知りたいという方は、ぜひこの機会に博物館へお越しください!



▲大山の田イモ畑



▲綱引き前のアギー勝負

企画展開催中!

ぎのわんの『字』展
「大山展〜和気満堂協力一致〜」

3月6日(日)まで、入館無料

【お問合せ】

市立博物館 ☎870-93317

茶ぐわーゆんたく

142

ソテツ地獄

「ソテツ地獄」、このおどろおどろしい言葉聞いたことはありますか。1920(大正9)年から始まる第一次大戦後の戦後恐慌の影響を受け、沖繩は慢性的不況に陥りました。農村では、サトウキビを主産業にしていたので食糧難となり、ソテツを食べて飢えをしのぐ者もいました。ソテツには毒がありますが、毒抜きをすれば食べる事ができます。しかし、なかには毒抜きに失敗して中毒になる者もいました。このような大正末期から昭和初期の窮乏していた悲惨な状況が「ソテツ地獄」という言葉で表現されました。

この時期、生活を支えるために、海外移民する者や本土への出稼ぎ労働者が増えました。とりわけ、女子若年労働者は

県出稼ぎ者全体の6割に上り、宜野湾村からも小学校を卒業した十二、三歳の女子を中心に、本土の紡績工場に働きに出る者がいました。工場での一日の労働時間は12〜14時間、月給は当初9円でその後、能率給だったそうです。女工たちは必死に働いて家族に送金しました。中には十歳の子もいて、朝、いつも泣いていたという証言もあります。また、標準語がうまく使えないため、差別やいじめを受けた者もいました。長時間労働と劣悪な作業環境で多くの結核患者もでました。

当時は、子どもの身売りも公然と行われ、女子は辻の遊郭に、男子は糸満の漁師の所に売られました。この時代は大人同様、子どもたちも働いたのです。「ソテツ地獄」という言葉については、

実際はソテツに救われたのだから適切ではない、と言う研究者もいます。有用で生命力のあるソテツからは、未来をたくましく生きていく力を感じませんか。

「宜野湾市史」への問合せ

市立博物館 ☎870-93317



▲宜野湾村出身の紡績女工たち1935(昭和10)年
まだ、幼いようすが見てとれる。



▲ソテツ(森川公園)